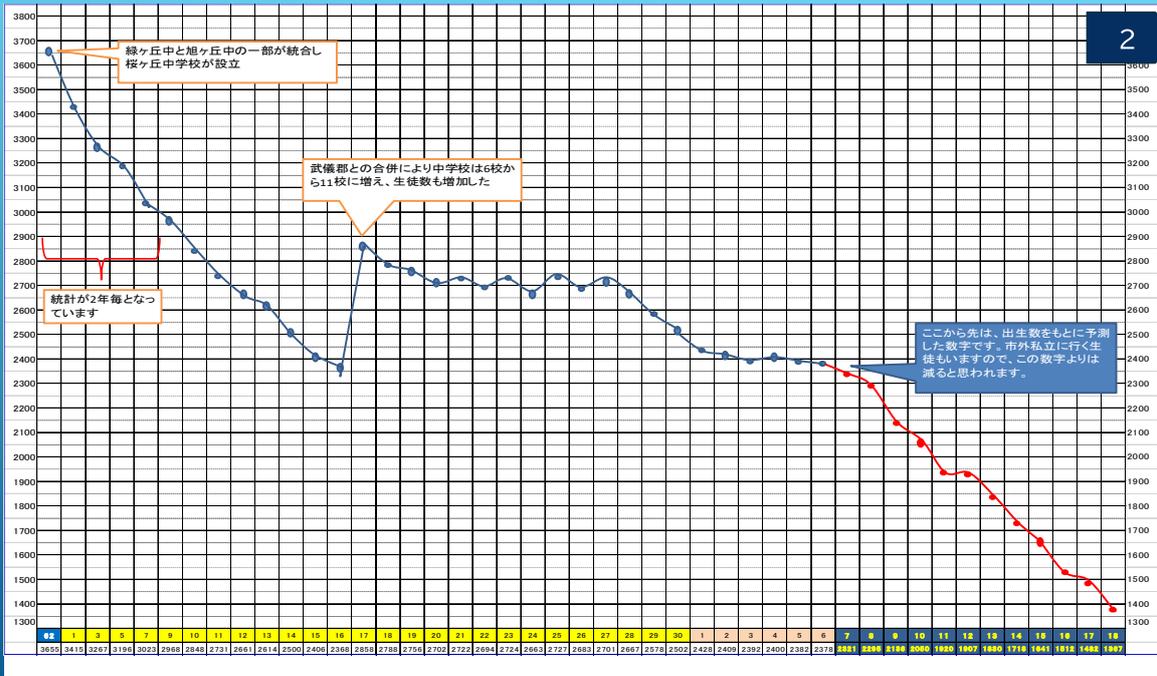


関市地域クラブの進捗状況 (関市スポーツ推進審議会)

令和8年2月5日（木）
アテナ工業アリーナ会議室



なぜ関市に地域クラブが必要なのか

3

◆一番の原因は・・・生徒数の減少

昭和62年 3655人（関市中学校6校の生徒数）

平成16年 2368人

平成17年 2858人（武儀郡との合併により増加 6校から11校に）

令和7年 2255人（関市中学校9校の生徒数）

38年間で **1400人の減少**

今後さらに人数は減少する → 部活動の存続の危機

30歳以下の人口の推移

4



なぜ今・・・その要因は！

5

◇教員の働き方改革

- ・業務の軽減

◇学校部活動加入の自由化

- ・部活動は子どもたちが主体的に取り組むもの。強制的に行わせるものではない
- 令和6年度の**関市中学校部活動加入率 約75%**

◇指導者、顧問の専門性

- ・顧問が必ずしも専門的な指導の知識・技術があるとは限らない

◇集団スポーツの人数不足

- ・野球、サッカー、バレーボール、バスケットなどの集団スポーツが成立しない
- ・合同部活動でしか参加できなくなっている
- ・原則学校部活動なので、学校の部活同士の合同以外、他の学校の生徒が自由に参加することができない

6

岐阜県中学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する
総合的なガイドライン

〈令和5年3月〉

令和7年度末を目途に（令和8年3月）

学校部活動の休日の活動を、地域へ移行する 〈岐阜県教育委員会〉



+ 令和6年3月 関市地域クラブ登録開始

方針 『部活動の意義の継承とともに、子どもたちに活動の選択の場を少しでも確保する』



+ 令和7年3月 各クラブの代表者からなる

+ **関市地域クラブ連絡協議会設立**

令和7年関市地域クラブの現状 (令和7年12月現在)

◇登録数 **42クラブ**

◇種目 **14種目**

硬式テニス・ソフトテニス・バレーボール・陸上・ラグビー・サッカー
軟式野球・剣道・バスケット・卓球・バドミントン・ソフトボール
トランポリン・吹奏楽

◇生徒数 **会員754人** (市内中学生641人 市外40人 小学生73人)

◇指導者 **233人** (有資格指導者141人) **全987人**

※関市の中学生の**加入率 28.43%** (令和6年度15.52%)

令和7年関市地域クラブの現状 2

・令和5年4月 市内中学校部活動数 **97**

生徒部活動加入率 76%

運動系部活**58%** 文科系**18%** 無所属**24%**

・令和7年度12月 地域クラブ数 **42**

地域クラブ加入率 約28%

文科系クラブは吹奏楽の**2クラブ**

・学校の壁を越えた募集クラブ**39** (全42クラブ中)

新たに見えてきたこと

◆年々生徒数は減少

- ・ 持続可能なクラブの運営
(生徒数減少によるクラブの精選の必要性)
- ・ 学校・地域との連携の在り方

◆地域クラブ連絡協議会の役割

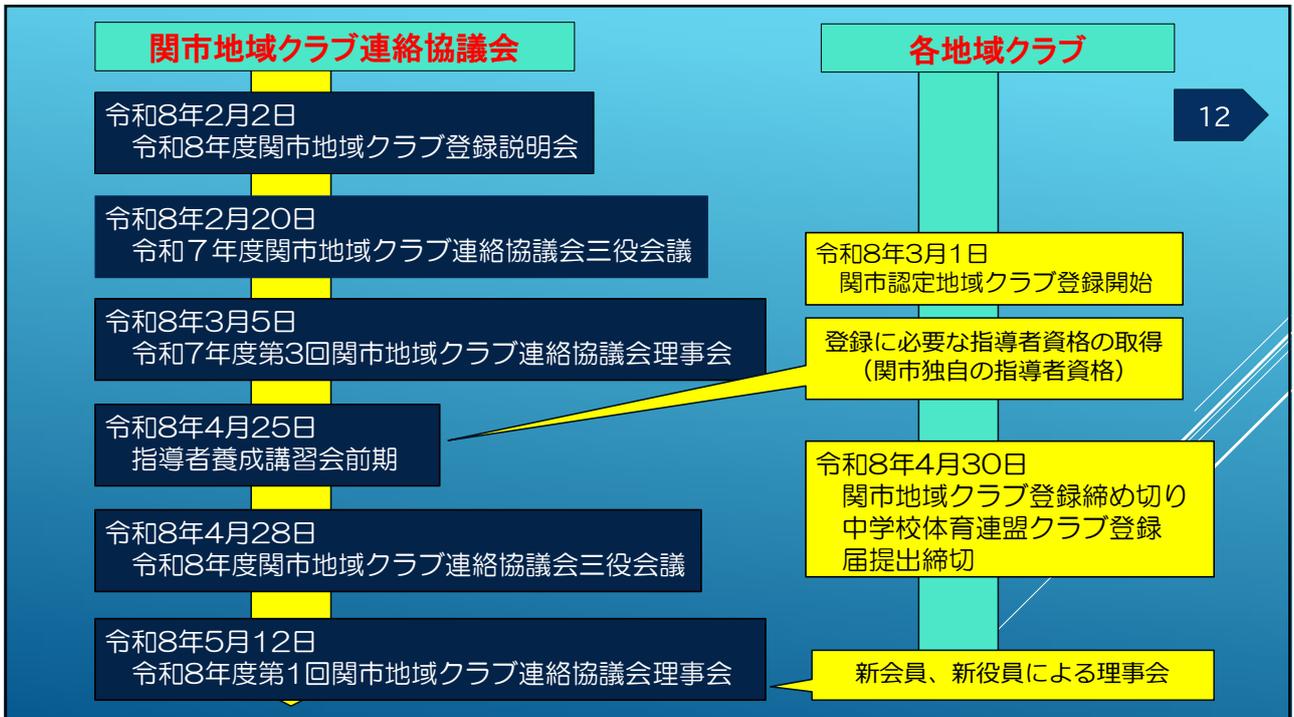
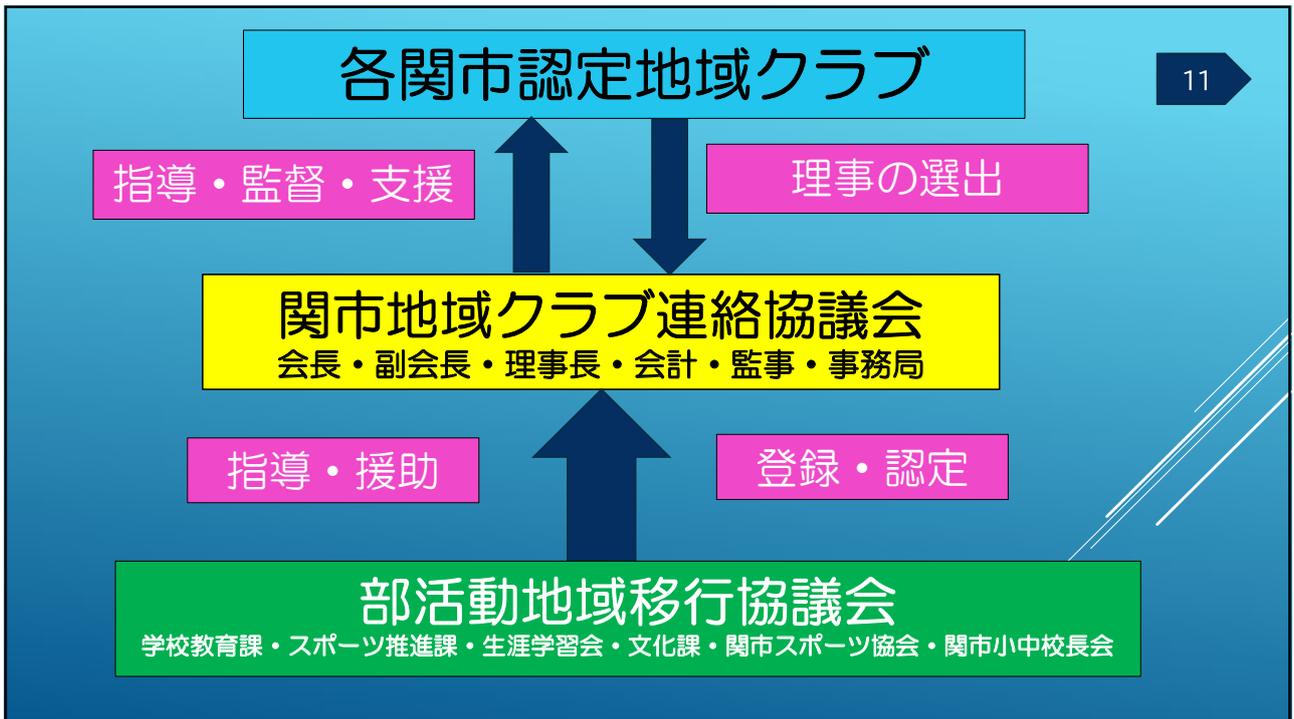
- ・ 各クラブの適正な運営に対する支援、指導
- ・ コンプライアンス意識の高い指導者の発掘、指導
- ・ 各種研修会の開設

令和7年12月 文部科学省

部活動改革及び地域クラブ活動の推進等 に関する総合的なガイドライン

～子供たちのスポーツ・文化芸術活動の充実に向けて～

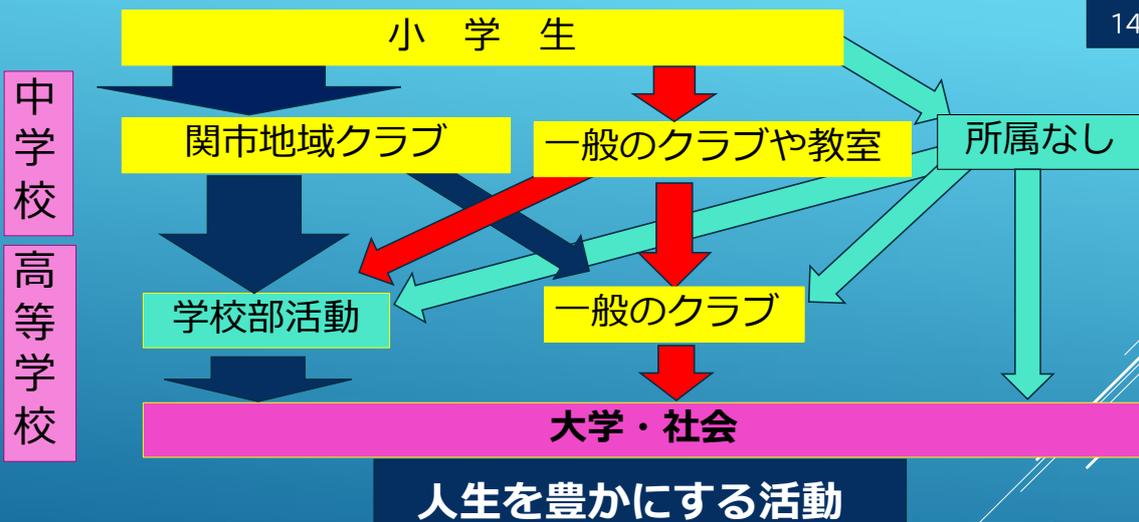
- ・ 部活動の地域移行から**地域展開**へ
- ・ 市区町村による地域クラブの認定化
「認定地域クラブ」 → **適切な活動時間や休養日・低廉な参加費
適切な指導実施体制の確保**
活動時間 平日は2時間程度以内 休日は3時間程度以内
一週間の活動時間は11時間程度以内
- ・ 学校部活動が担ってきた教育的意義の継承・発展及び、地域全体で支えることによる
「新たな価値の創出」 → **多種多様な体験、個性・得意分野の尊重
学校の垣根を超えた繋がり、良質な指導**



予想される今後の課題

- ◆存続が不可能なクラブ
クラブ員の減少・目標の相違・指導者との対立など
- ◆ガバナンスやコンプライアンスの順守
指導者の生徒に対する暴言・暴力などの体罰
生徒同士のいじめ
- ◆活動の金銭的補償
会費やクラブ運営に必要な経費の負担軽減

安定した地域クラブ運営



この地域クラブは、子どもたち誰もが平等に、スポーツや芸術のよさに触れ、生涯を通して、生きがいとして取り組めるものを探す場にしてほしいと考えています。そして、その場の提供は、大人がすべきと考えています。決して、オリンピックのメダリストを育成したいとは考えていません。しかし、一部では、その大人のわがままで、笑顔で活動できていない子どもたちもいます。

10年、20年後、今の子どもたちが大人になって「昔のほうが良かった」なんて言わないよう、将来を見据えた対策を真剣に考えなくてははいけないと思います。

こうなることがわかっていたにもかかわらず、何もしてこなかった、私たちの責任は大きいです。